

教職大学院

Newsletter

No. 52

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2013.04.20

和歌山での初任段階の高度化研修の取組

和歌山県教育委員会学校教育局長 岸田 正幸

教員の資質能力の向上方策について、中教審答申が昨年8月に出版されて以降、政権が変わり、国の教員養成に関する制度改正の動向は、未だ不透明な状況にあるが、答申に盛り込まれた教員の高度専門職としての位置づけは、今後も変わることはないだろう。

教員の資質向上の在り方については、かつての教養審の時代から「求められる教師像」が繰り返し盛り込まれ、その都度、必要となる改善策がとられてきたはずではあるが、未だ長期的展望が見えてこないのは、教員養成の制度設計がいかに難しいかを示したものである。

今でこそ、教員養成や現職研修に係る大学と教育委員会や学校との連携・協働が声高に叫ばれ、各地で具体的な取組が進みつつあるが、学問的専門性が必要であると唱える大学側と教師は実践によって育つというデマンドサイド側の主張を背景とした両者の根深い相互批判的意識は、この問題の解決を難しくしてきたことは否めない。その点、福井大学の教職大学院の取組は、相互信頼に基づく理論と実践を融合させた教員の資質向上方策として、私にとっても学びの多い先導的事例だったし、実際にラウンドテーブルにも参加して、なるほどこの場を共有することにより、「自らの教育実践に対する省察の気づき」が生まれると感じたものだった。

3年前、前述の中教審特別部会において、教員養成の修士レベル化の議論が始まった当初から私は、採用後の初任者研修と教職大学院での学びを融合させた形で修士レベル化を実現することが、最も現実的で有効な方法であろうと主張してきた。教職大学院が修士レベル化の中心的役割を果たすのは当然のこととしても、今後の教員免許法の改正まで視野に入れた制度設計を考えたときに、全国で3万人程度にもなる新規採用者の修士レベル化の学びを教職大学院を含めた大学院がすべて担っていくことは現実的ではないと考えていたからだ。

一方、導入から20年以上経過した現行の初任者研修についても、改善の必要性を感じていた。あんなに意欲的に初任者研修に取り組み、よい教師になろうと

していた新規採用者が、学校における同僚性の希薄化等の課題があるとは言うものの、5年程度の間は目の輝きを無くし、目の前の仕事をこなすだけの教師になっていくケースが見られるのはなぜか。確かに、初任者研修は、教員として必要となる知識や技能を身に付けさせるには、よく練られた講習になってきており、そこに間違いはないけれども、よい教師になるための条件である生涯学び続ける教師を育てるためのカリキュラムにはなり得ていないのではないかとといった意味での課題意識である。

こうした考えのもと、この度、答申に盛り込まれた「大学と教育委員会との連携・協働による初任段階の研修の高度化システム」を和歌山で実施できないか、といった提案を和歌山大学にさせていただいた。大学側もこれに意欲的に応えてくれ、むしろ主体的に取組として進めてくれようとしていることに感謝している。このモデル事業は、全国で初めてとなる大学院をフィールドとした初任者研修の高度化プログラムであり、コンセプトは、福井で学ばせていただいた「自らの教育実践に対する省察の気づき」である。それを実現するために、大学で行う月1回の合同カンファレンスや協力校内での自校カンファレンスを組み入れた高度化実習を核としたカリキュラムを作成した。大学院での講義も提供してもらう予定だ。協力校となる小中、特別支援学校計7校に配属された18名の初任者が、この高度化研修を通じて、学び続ける教員となるための基礎的な資質をどのように獲得していくか、ワクワクした気持ちで見守りたいと思っている。

内容

- 和歌山での初任段階の高度化研修の取組 (1)
- 学位記伝達式が終了しました (2)
- 開講式が開催されました (2)
- staff紹介 (4)
- 院生紹介 (8)

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

平成24年度 学位記伝達式が終了しました



福井大学教職大学院 笹原 未来

去る3月22日金曜日、教職大学院の学位記伝達式並びに閉講式がコラボレーションホールで行われました。スクールリーダー養成コース20名、教職専門性開発コース10名の合計30名が教職大学院を修了し、新たな一歩を踏み出しました。

24年度3月で教職大学院は5年目を終えることになりました。第5期生となる30名の院生の修了に加え、これまで教職大学院を支えてくださった津田先生、川上先生、石井先生の退任、吉村先生、隼瀬先生の異動もあり、教職大学院はまた一つ大きな転換期を迎えることとなります。専門職として学び続ける教員、学校を支える教職大学院の取り組み、教員養成改革に向けた取り組みを一層発展していくことができるよう、我々もまた歩み続けていきたいと思っております。

今年度修了された院生のみなさん、修了おめでとうございます。みなさんの今後の活躍を、心より期待しております。



学位記伝達式では、研究科長の中田先生から修了生一人ひとりに学位記が授与されました。その後、引き続き行なわれた最終カンファレンス（閉講式）では、2年間、あるいは1年間の取り組みをグループで振り返り、これから始まる新しい1年にそれぞれ思いを馳せ、希望を語り合いました。



平成25年度 開講式が開催されました

福井大学教職大学院 森 透

去る4月6日（土）13時30分から15時30分まで、平成25年度の開講式が6階のコラボレーションホールにて開催されました。あいにくの春の嵐の悪

天候の中、M1の教職専門性開発コースの学部卒院生15名、スクールリーダー養成コースの現職院生18名が出席されました。M2の院生も会場の後ろで暖か



く見守っておられました。司会の濱口先生の進行のもとで、最初に中田隆二研究科長の挨拶がありました。中田研究科長は、福井大学教職大学院は今年度で6年目に入るが全国的にも注目されている大学院で、昨年8月の中教審答申の中にも紹介され基本的に学校を拠点とした福井方式を構築してきていること、現職院生は現場を離れずに勤務しながら大学院で学んでいること、学部卒のストレート院生は1年間、週3日インターンシップ生として拠点校で教師の総体を学んでいること、2つのコースとも2年間大変であるが多くのものを学んでほしいと激励されました。次に、松木健一専攻長からの挨拶がありました。松木専攻長は手品師のようにポケットからいろいろなカードを出し、授業づくり、教科の専門性、子ども理解、学級経営、マネジメント、保護者対応など、教師には非常に多くの力量が求められていること、それらについて大学院で学んでほしいが全体がバラバラではいけないこと、毎月合同カンファレンスや夏と冬の集中講座を通して、自身の中で総合・統合して教師としての専門性、専門職としての教師の力量を高めてほしいこと、実践一省察一再構成の連続した営みを通して、最後は2年間のまとめを実践記録として長期実践研究報告に表現してほしいと強調されました。33名の院生は緊張しながらも、心の中でお二人の激励の言葉をかみしめながら聴いていたようです。

松木専攻長は挨拶のあとに、教職大学院の担当者(スタッフ)全員の紹介をされました。その後、「カリキュラムの構成と意味、年間計画について」(木村優)、「4月の合同カンファレンスについて」(柳澤昌一)、「各学校の担当と指導教員について」(杉山晋平)、「授業料減免申請、奨学金申請等について」(森透)、「事務連絡」(山口真希)、「履修登録用紙、指導教員届の記入」(笹原未来)、の順番で説明がありました。約1時間程度挨拶と説明が続きましたので院生は若干疲れた感じでしたが、その後は、全体

の記念写真撮影と分科会(今後の連携に係る日程調整等)が行われました。

分科会は14の小グループ(4-5人)で、そのグループにはM2とM1が交じり合うようなグループ構成でした。私のグループはスクールリーダー5名で、M1が3名、M2が2名、最初に5人全員の自己紹介から始まりました。特にM1の先生方はそれぞれが歴史と背景をもち、今回の入学に関しては様々な思いがありました。福井大学の教職大学院が創設5年を経過し全国的にも注目され、多忙な中でも自身の職場に根付きながら「学ぶこと」「学び続けること」を中軸としていることに共感を持って入学されたように思われました。研究主任や教務主任という重要な職責を担う中で、スクールリーダーとしていかに学び成長していくかが、共通に意識されている課題であると感じました。M1の自己紹介のあとは、いよいよM2の出番です。丁度1年前に同じような不安と緊張感をもったM2の先生方が1年間を院生として学び続ける中で感じたこと、重要だと考えることについて率直に語っていただきました。1年間の実践の歩みはすでに実践記録としてまとめあげ3月のラウンドテーブルで報告されている2年生ですが、いよいよ2年目の今年は何を目指して取り組んでいくかという点で、新たな緊張感と意欲が感じられた語りでした。

以上のように、開講式はM1もM2も緊張感と新たな気概に燃えた雰囲気のもとで2時間の日程が終了しました。今後の展開が楽しみな開講式でした。

Staff 紹介



二宮 秀夫 Hideo Ninomiya

今年度、大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）教授として着任しました二宮秀夫です。3年間という期間ですが、母校である福井大学の教員として勤務できることをうれしく思っております。

これまでの私を振り返ると、昭和55年に本学の教育学部中学校教員養成課程英語科を卒業以来、大石小学校、春江中学校、大東中学校、福井大学教育学部附属中学校、安居中学校において教諭として18年、文殊小学校、木田小学校において教頭として6年、また、県教育庁義務教育課の指導主事や参事として9年と、多様な職場を経験してきましたが、一番の関心事はやはり日々の授業であったように思います。よい授業を成立させるには、教科の知識や指導のノウハウだけでなく、生徒理解力や子どもとの人間関係づくりの力などのトータルな力量が問われます。よりよい授業を目指すことで、教師として成長していったのではないかと思います。そこで今回は、私自身の教諭時代の授業のことを少し振り返ってみたいと思います。

教職のスタートは小学校からでした。英語科教員を目指してきた私にとっては、専門の教科ではない様々な教科を教えなければならない状況にあって、なかなか思うような授業ができませんでした。そこで、なんとか授業を変えようと、先輩の先生方の授業を参観したり、校外の授業研究会にもよく参加したりして、よいと思うことを取り入れようとしていました。子どもたちが次々と自分の思いや考えを言い合い、それを先生がうまく繋ぎ深めていく授業にとってもあこがれましたが、自分が研究会で見えたことを同じように試みても、いつも子どもたちの反応がまったく異なる現実を経験し、教師としての力量を高めることの必要性を切実に実感した時期でもありました。

中学校に異動後は、英語科の教員としてよい授業を目指し試行錯誤の毎日でした。私の先輩である福井大学の先生を中心として毎週行われる小グループの勉強会や、毎月大学で行われる英語教育懇話会の研究会にも参加しました。そこで学んだ理論は、自分の実践を振り返り考え直す大きな力になりました。理論を学ぶことで新たな視点から活動を考え実践し、また、子どもたちの活動の状況を振り返り改善するサイクルにより、満足できる授業が少しずつ増えていったように思います。

4校目となる附属中学校では、日々の授業研究とともに、自校での研究発表会以外にも、研究実践発表の機会が増え、折々の実践を振り返りまとめることが多くなりました。書くことが苦手な私にとって辛いこともありましたが、普段から自分の授業を振り返り成果や課題をまとめる習慣がつかえました。当時はコミュニケーション型の英語授業の在り方について研究していましたが、活動の必然性はあるか、意味にコミットした活動となっているか、自己との関わりがあるか、生徒にとって分かるレベルの英語になっているか、教師と生徒や生徒同士のインタラクションはあるかなど、研究により得た様々な視点で実践を振り返ることで、授業を質的に高めていけたように思います。

ところで、教師に求められる力量は、授業だけでなく、生徒指導、学校行事の企画・運営、保護者への対応、地域との連携と多岐にわたるもので、授業さえできればよいというわけではありません。しかしながら、授業は毎日継続して行う教育活動で、学校での教育の中核となるものであり、授業改善により教師の力量をアップさせることにもつながるものだと考えます。

授業は教師だけでできるものではなく、子どもと協働して創り上げるものです。授業改善には、授業後に子どもの様子や変容などを振り返り改善することが重要です。授業をオープンにし、参観した同僚と協働して振り返ることも大切です。そして同僚の意見等をもとに今一度自分の授業を振り返ってみることが重要です。このような省察により教師としての力量が形成されていくのだと思います。

私自身を振り返ってみますと、どの学校でも校内授業研究会等での議論の中から、授業改善の視点や手立てなどを得ることがありました。また、研究会というフォーマルなものでなくても、部活が終わり生徒を帰した後、職員室の一角で仕事をしながら他教科の先生とそれぞれの授業について語る中から、授業に生かせるヒントを得ることもたびたびありました。このような普段の同僚とのコミュニケーションの営みも、教師の力量形成につながる重要な部分と考えています。

今子どもたちに求められる力は、思考力・判断力・表現力など知識・技能を活用し正解のない課題を解決する力を育てることです。そのためには、単なる知識伝達・反復学習ではなく、子どもたちが課題解決のために協働して学び合う授業が求められます。しかしながら、普段の授業ではなかなか実践できないのが現状のようです。子どもたちの協働した学びを実現するに

は、個人の努力だけでは難しく、教師同士が協働して学び合う学校組織づくりが欠かせません。これは教師の大きな使命であることを私自身も自覚し、教職大学

院のスタッフや現場の先生方とともに学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。



小林 真由美 Mayumi Kobayashi

今年度、大学院教育学研究科准教授として着任した小林真由美です。私とこの福井大学とのつながりと言えば、さかのぼること30年近く前、私自身がこの福井大学で学

生として学んだことをスタートとして、まず、平成17年度から3年間、福井大学教育地域科学部附属中学校で勤務しました。このとき、実習主任として教育実習で学生と関わったことや、この期間に担任した子どもたちがちょうど今、学生としてこの福井大学に在学していることで、赴任した日から今日までの短い期間にも、懐かしい出会いがありました。附属中学校の後、福井市教育委員会にて学校教育課の指導主事を務めることになり、その間にも教職大学院の担当として関わる機会をいただきました。また、昨年度は清水西小学校で新任教頭となり、夏季休業中に新任教頭研修として、福井大学で行われた免許更新講習のお手伝いもさせていただきました。こうして振り返ってみますと、様々な立場でこの福井大学と関わってきたのですが、これまでは外部の別の立場からの関わりであり、こうして大学院教育学研究科の中で務めるということに改めて職責を感じるとともに、大学という新しい場所に身を置いて、新たな自分自身の成長につなげていきたいと思っています。

様々な立場から大学を見てまいりましたが、共通して言えることは大学とはやはり「学ぶ場」であること。それに対して、これまで学校は、いわゆる「現場」であって、教員にとって「働く場」であり、子どもたちに「教える場」として捉えられてきました。しかし、昨年の中教審の答申にもあるとおり、もはや教員は単なる就業者ではなく「学び続ける教員」として、時代のニーズに合わせて常に向上していくことが求められています。だからこそ、この教職大学院では、学ぶ立場の学生とともに、現場で働く教員もまた「学び」を求めてやってくるということ、そしてそのおかげで学校という現場も「学ぶ場」として学校全体で学ぶ体制づくりを改革しようとしていること、このことに教職大学院の大きな意義を感じます。指導主事を務めていた間に、教職大学院で学ぶ先生方とお話する機会を持った時に「お忙しくて大変でしょう？」とお尋ねすると、必ず「忙しいけど楽しいんです。

やっぱり、ここに来て良かったです。」という返事をいただきました。そして、そう話す先生方の目は、授業が楽しくて夢中になって学習に取り組んでいる時の子どもたちの目と同じように輝いていました。人間は、本来、学びたいと思う動物なのだと思います。学びたいというニーズに授業を上手に絡められれば、子どもの力がめざましく伸びるように、この教職大学院の在り方をこの大学院の学生の学びたいというニーズに上手に絡められれば、やはりその方々の力をめざましく伸ばすことができるはずです。そして、それは教職大学院に直接来て学ぶ方々以外にも、広げていけるはずだと思います。それをどうコーディネートしていくか、ということが、自分なりに思う私の使命であろうと考えています。

しかし、一方で学校は、教員が学びを求める間さえない、という多忙化の問題も抱えています。不登校、いじめ、体罰・・・といった社会的にも取り上げられている問題に加え、虐待、クレーム・・・など家庭との問題もあり、目の前の問題に追われ、授業研究どころではないという声も聞こえてきます。教職大学院で学ぶことに魅力を感じながらも、1秒たりとも学校現場を離れられないという現実にも追われている教員も大勢います。そうしたつらい状況の中で、何を優先し、どうやって学び続ける体制づくりに取り組んでいくかということは、学校現場での経験を有する実務家教員である私たちが、反対に大学側に伝えていかねばならないと思っています。大学で学んだことが、本当に学校現場で生かされるためには、こうした現実を踏まえながら生きた実践となるようつないでいくこと、これもまた大きな使命であると感じています。

この福井大学に着任してわずか数日の間にも、大学の先生方や学生、そして現場の先生方からいろいろなお話を聞く機会がありました。そのたびに、自分の経験を振り返り、その経験と先生方のお話をリンクさせて「あのとき私もこんなふうに苦労したなあ」とか「こんな場合はこういう工夫ができたのか」と省察する時間を持つことができました。それがまさに、教職大学院で学ぶということではないかと思っています。前述した自分の使命をしっかりと果たしていくとともに、自分自身もともに学んでいく機会として、大事に一日一日を過ごしていきたいと思っています。どうぞよろしくをお願いします。



稲垣 良介

Ryosuke Inagaki

染井吉野が満開になりました。院生の皆様、ご入学おめでとうございます。

平成25年度より、教職大学院の専任（兼担）の教員としてお世話になります。稲垣と申します。関係の皆様方、どうぞよろしくお願いたします。

専門は、体育科教育学です。学部では保健体育科教育法、バレーボール他を担当しています。最近の研究課題は、水難防止に資する学校体育の在り方です。

わたしは、教育現場で17年間（高等学校2年、中学校14年、小学校1年）子どもたちと汗と泥にまみれて実践を行ってきました。赴任させていただいた学校は全て、ごく「普通の現場」でした。「普通の現場」には、それぞれユニークな特徴があります。先輩諸氏には到底かないませんが、各学校でいくつかの経験をさせていただいてきた次第です。教職大学院には3年間お世話になります。院生の皆様と同様に関係する全ての方との出会いをよい機会とさせていただき、何かを得させていただきたいと思っております。

さて、本日（4月2日）、本年度第1回目の専攻会議が行われました。福井大学に着任後3年が経過しました。ようやく、慣れたところでの移籍にとまどいつつ、環境が変わる4月のスタートに新鮮さを感じています。

専攻会議では、耳慣れない事項が次々に現れ、3時間があっという間に過ぎました。要領の得ないわたしは資料を探すのに手一杯の状況でした。会が終了するや否や、今般の原稿の依頼をいただきました。

私こと、某先生に「2・3月は、大学教員の稼ぎ時だ。」とお聞きしたことを思い出し、つい先日まで課した目標遂行のため、（自己評価では）かなりのエネルギーをつぎ込みました。いくつかの仕事を並行する中で、体力、気力、能力の限界を感じ始めたころ、気分転換に全く違う仕事をすることにしました。体育関係の専門誌にかねてからの持論を述べることにしたのです。不健康な生活が明らかになってしまうので時間は伏せます。表1つと図4つを作成し、6500字を4時間で書き上げました。翌日、早速、社会貢献のために貴誌に掲載願いたい旨の手紙を添え、編集部に郵送しました。それまでの仕事が嘘のように、一気に書き上げた原稿です。結果、2日後、あっさり7月号に掲載するとの連絡が入りました。

なぜ、このようなことを書いているか、正直に申し上げます。うって変わって本稿2000字の「自己紹介」を前に、全く筆が進まないからです。希望に満ちた内

容を書き連ねられれば良いのですが、どうもそうはいきません。そこで、なぜ、自分の筆が止まっているのかを述べ、自己紹介に替えさせて頂く作戦をとることにします。

最大の理由は、教職大学院における自分の立ち位置がつかめていないことです。確かに、文科省によれば、実務家教員は「…単に事例についての知識の豊富さだけではない。教職大学院における指導内容が、実践の構造化、臨床的な実証研究の構築であることから、実務家教員には、事例や事例知識等をコーディネートしていく役割とともに、理論と実践の架橋を体現する者として、研究的省察を行い、リードする役割が求められる。」等と記されています。一行目は当然として、後半部は積然としません。大学に身を置く者である以上、研究（教育も）をするのが仕事と一方で圧迫を受け、とはいっても実務家だからこっちはねと都合よく扱われるように思えます。このようなことは意に介さず、信じた道を邁進すればよいのでしょうか。しかし、わたしの中のもどかしさがそれを邪魔します。さらに、悩ましいのがスクールリーダー養成コースです。教育現場で管理職になったこともないのにスクールリーダーの養成に寄与せよといわれても困る、というより無理ですよ、というのが正直なところなのです。（とはいっても他の先生方を見倣って職責を果たす気持ちはあります。（念のため））

全国25教職大学院の実務家教員の方々は、これらをどのように昇華しているのでしょうか。

さて、作戦通り、ある程度文字数が埋まってきました。まとめに入ります。

・・・木を見て森を見ず、という言葉があります。

なるほど、今振り返ってみるとわたしの教育実践はまさに、この言葉通りの感があります。目の前の子どもと日々、奮闘、実践してきたという意味です。そこには、一歩引いて実践を俯瞰したり振り返ったりする余裕はありませんでした。ただし、森は見えずとも木は見えてきた、という自負もあります。（森だけを見て、木を見ようとしないことに対するささやかな抵抗。）考えてみると、教育実践の理想は、結局のところ、木を見て森を見て、と、森を見て木を見る、・・・の繰り返しののだと思えます。そして、それは、「研究と現場の架け橋（往還）」中に具現するのだと解釈します。その他、いくつかの不明な点はそのうち解決できると信じることにします。

最後に、専任（兼担）期間を全うする際の退任挨拶で書けたら（言えたら）いいと思うことがあります。小さなことなのですが、それが果たせるよう微力を尽くさせていただきます。



藤井 佑介

Yusuke Fujii

はじめまして。4月より特命助教として着任いたしました藤井佑介と申します。今後よろしくお願ひいたします。着任して数日経ちますが、まだまだ右も

左もわからず不安なことが多いです。ですが、毎日いろいろな先生方から刺激を受け、勉強させていただいております。教職大学院の全国的なモデルとなっている福井大学教職大学院のスタッフとして加われたことは、大変光栄なことだと思っております。と言いますのも私自身、学部と修士は教員養成系の大学の出身であります。周りの友人たちはほとんどが教員になっておりますが、彼らが学士時代を通してどのような専門性を身につけたかということになると、少し疑問が残るところです。現場に出た友人が口々にする言葉は「大学で学んだことは現場では役に立たない。」ということです。これは大学の教員養成における一つの課題であり、理論と実践の融合や調和というのはこれまでの研究の流れの中でも大きく取り上げられていることです。大学で学ぶこと（座学）においては大変重要なことを伝えているが、現場を詳しく知らない学生にとっては、自分の経験や知識とリンクすることが無く、スキーマの変容があまりみられないようです。これらを現在、可能な限り実現しているのが、福井大学教職大学院です。インターンシップの形を取り、現場経験とそれに基づくカンファレンスを行う。これらの過程が理論と実践の融合を限りなく可能にしております。これらの仕組みやシステム、そしてそこに内在する教師の成長を間近で体験できるというのは、教師教育に興味のある研究者にとって恵まれた環境であると思っております。D. ショーンらの省察をはじめとする諸理論から教職大学院を作り上げられてきた先生方と一緒に仕事をさせていただけなので、できるだけ多くのことを学び、吸収し、今後の自分の研究にも活かしていきたいと考えております。

ここからは上記の件も含めまして、私の経歴と研究に関して述べようと思ひます。私は長崎県佐世保市の出身です。学部時代と修士時代は長崎市にて過ごしました。私が長崎で修士をやっている一つ下の学年から教職大学院が始まり、このときから教職大学院のシステムには教師教育の改革という視点において大変関心を持っておりました。その後、人間活動理論を学ぶために大阪府内の研究センターにて一年間研究に従事させていただきました。博士課程の大学院はさらに九州へと戻り、日本学術振興会の援助も受けながら、そこで3年間研究をして参りました。私の専門としているのは教育方法学であり、特に授業分析です。授業というのは一過性の生成物で

あり、二度と全く同じ状況を生み出すのは不可能と言われております。私はその一過性を重要だと考えております。これは質的研究にも関わってくるのですが、授業分析というのは仮説検証的ではなく、そこから生成される事柄を観察者（研究者ほか）ならびに授業者、子どもの視点によって切り取ることによって成り立ちます。それらを擦り合わせることによってより重層的な授業分析が実現されるのです。授業分析という言葉を最初に使ったのは元名古屋大学教授の重松鷹泰で、名古屋大学に教育方法学講座を作った方でもあります。重松鷹泰は愛知教育大学等に多くの授業記録を残しております。それらはすべて授業内の会話を記録したものに一万点以上に及びます。重松はこれらの記録を「授業のかんづめ」と言っております。授業の都合の良いところばかりだけを残すのではなく、事実をできるだけ正確に記録することを意味しています。これらの資料をいかに活用するかということ、また、それらを残していく意義と今後どのような記録を残していくかということは課題となっております。福井大学教職大学院でもニュースレターや大学院修了者の記録等、様々な媒体で記録がのこされておりますが、これらをいかに有効活用するかといったシステムの構築（外部への発信や宣伝も含む）にも大変興味があります。私自身の授業分析に関する研究は重松鷹泰、上田薫（元都留文科大学学長）、中村亨（九州大学名誉教授）、田上哲（九州大学大学院准教授）等の理論やスタンスを引き継ぎながら進めております。基本的に授業の全体的な様相を発言内容や構成から読みとくとといったことに関心を持って研究しております。中でも協同学習における子ども達の会話のやり取りと学びの過程に興味があり、これらは様々な要素が複雑に絡み合っており成り立っております。近年、一斉教授ではなく、グループを盛り込んだ学習というのは再評価されてきており、佐藤学の「学びの共同体」も全国に普及しつつあります。グループ学習を含む授業の分析を行うにあたって、各グループの会話を取ります。このデータこそが教師にとっては重要な要素となります。教師は一度に一つのグループにしか介入できません。その時は他のグループがどのような会話の発展をしているのかをその場で把握することは物理的に不可能です。授業後にデータの提示を行うと驚かれることが多いです。自分が介入する前にこのような展開だったのかということを知ることができ、反省的な実践へと結びつけていきます。

以上のようなスタンスで研究を行って参りました。まだまだ微力ではありますが、これまで培ってきた研究の成果に加え、これからの研究が福井大学教職大学院の発展に少しでも寄与できるよう頑張っていく所存です。どうぞよろしくお願ひいたします。

院 生 紹 介



河 邊 里 紗 子 かわべ り さ こ

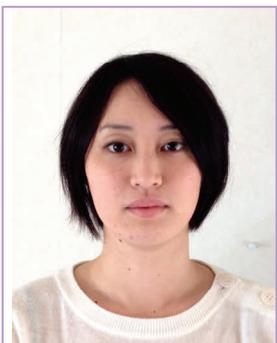
私の名前は河邊里紗子です。科目は家庭科です。私は、小さな頃から教師を目指していましたが、大学での教育実習で「教師は何年続けても、生徒との出会いは一期一会であり、毎日が新鮮で、なんてやりがいのある素敵な仕事だろう」と実感し、改めて教師になりたいと思いました。しかし、たった4週間の実習しか行っていない今の自分には、教師になって生徒を育てていけるだけの力があるのだろうかと不安がありました。そのとき、1年間以上もの長期に渡って、実際の教育現場でインターンを行っている教職大学院を知り、自分に足りない実践力を身に付けるにはここしかない、と進学を決めました。

私のインターン配属先は福井市の至民中学校に決まり、4月1日から週に3日間、中学校に行かせていただいています。私は院生なのですが、学校では他の先生方と同じように、生徒が学校に来ない期間にも学校に行き、会議等にも参加したりします。私は、生徒がいない間は先生たちも仕事がないのではないだろうかと思っていたのですが、それは大きな間違いでした。先生方は、春から始まる新しい1年に向け、生徒たちを安全に学校へ

と迎え入れるために、綿密に会議を重ね、体制を整え、準備をしていたのです。このように、教師という仕事の総体を、学生の段階で学ぶことができるということは、他にはないとても貴重な体験であると感じています。また、至民中学校の先生方はとても団結力があり、温かく私たちを仲間として迎え入れて下さり、とても嬉しく思いました。またそれと同時に、このような環境の中で1年間学ぶことが出来ることをとても幸せに思っています。

私は、インターン先で、中学1年生の副担任になりました。1年生はとても明るく元気で人懐っこい生徒たちばかりです。インターンはまだ始まったばかりですが、毎日学ぶことが多く、とても充実しています。1年間という長い期間を通して、生徒はどのように変容していくのか、自分の実践がどのように生徒に影響を与えるのか。インターンでは、4週間という短い期間では見ることが出来なかった、「生徒の成長」が見られると思うと今からとても楽しみです。

これからの1年間、自分の出来ることには全て挑戦し、一日一日を無駄にしないように沢山のことを吸収して、私自身も生徒と共に成長していけるように精いっぱい頑張りますので、よろしくお願いします。



池 田 郁 い け だ か お る

今年度、福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学した池田郁です。2年間よろしくお願いします。専門科目は社会ですが、学部生の時は日本史や地理などの勉強よりも、小学校の社会科について勉強していました。4月から美浜中学校で長期インターンシップをさせていただくことになりました。

私は、和歌山大学に入学し、和歌山の教育現場でたくさん勉強させていただきました。4週間の小学校実習や2週間の中学校実習で、児童、生徒との接し方や関わり方を特に意識しながら実習を行ってきました。さらにへき地にある複式の学校でも2週間の実習をさせていただきました。その複式学級での実習は驚くほどの連続でした。自分たちで学習を進めていく姿や、1年生が堂々と自分の考えや意見を集会で述べている姿など、大きな学校ではなかなか見ることのできない様子をたくさん見ることができました。しかし、免許

取得に必要な教育実習では、学校の現場に入れるのは長くても1ヶ月で、子ども達とも期間限定の浅い関わりしかできません。さらに、私は地元の福井県で教師になりたいと思っていましたが、和歌山の様子はなんとなくわかって、福井の学校現場のことなど何も知りません。そんな私が大学を卒業してすぐ、4月から教師として指導していけるのだろうかという不安でいっぱいでした。そんな中、福井大学の教職大学院の長期インターンシップのことを知りました。1年間同じ学校に行き続けることができる、実習だけではまだまだ知ることのできなかった教師の仕事について学べることができる、なんといっても福井の教育現場に関わることができる、「これだ!」と思いました。これが、私が教職大学院で勉強をしようと思った理由です。

美浜中学校でのインターンは始まったばかりで、生徒とはまだ関わっていませんが、すでに教師にはやるべき仕事がたくさんあることに驚きました。学級だよりを作ったり、新学期に向けて何度も職員会議を行うなど、これまでの実習では知ることのできなかった教師の仕

事の裏側を少し学べたように思います。授業づくりを勉強するのはもちろんですが、私はこのインターンで特に学級づくりの様子や生徒との関わり方などに関して、美浜中学校の先生方の姿を参考にさせていただきながら学んでいきたいと思っています。指導の仕方や、時と場に応じ

た生徒に対する話し方など、まだわからないことだらけですが、1年のインターンを終えた時に自分なりの方法を見つけることのできるよう、日々学んでいきたいと思っています。子どもたちに安心感と信頼感を持ってもらえる教師を目指して、常に笑顔でがんばっていききたいと思っています。



槌谷 春菜 つちや はるな

はじめまして！福井大学教育地域科学部音楽教育サブコース出身の槌谷春菜です。趣味は、ピアノ、歌、旅行、ダンス、スポーツ、ショッピング、読書、写

真、料理等々…、私は昔からいろんなことに興味をもち、好きなことには夢中になってとことん楽しみ、こうありたいという思いのままに突っ走る性格でした。そして、小、中、高、大学と、これまで多くの先生方とめぐり合う中で、多くのことに興味を持ち、挑戦する精神を教わりました。そのおかげで、私はこれまでの人生での様々な経験を通して、何事にもくじけず、前向きに、生きる喜びや幸せを感じることができています。

これまでの自分がそうであったように、今の子どもたちにも意欲を持つための豊かな感受性や、自ら行動するための積極性、何事にもくじけない精神力を身につけ、生きる希望や豊かな心を持って、のびのびと生きて欲しいです。そのため、私も、子どもたち一人一人が将来に希望を持って生きていくための力添えがしたいと思い、将来は教師になろうと決意しました。

福井大学での4年間の大学生活のコミュニティにおける多様な実践を通して、教師として人と共に生きていくためには、信頼されるために相手を尊重し、主体的

に行動し、そして謙虚に自分のあり方を見つめながらその場でのニーズに答えられるよう、継続して自分を高めていかなくてはならないと学んできました。また、批判的思考、発信力（自分の言葉で表現する力）、行動力、語彙力等の弱さが課題であることに気づきました。

そのため、今後私はこの教職大学院において、長期インターンシップやカンファレンス、研究会、文献、身の回りの小さな出来事からでも、自分の問いを持ち、テーマを見つけ、自分の言葉で表現しながら問いを再構成させつつ、一つの記録としてまとめて、その一つ一つを自分の確かなものにしていきたいと思っています。

私のインターンシップ先は、福井大学教育地域科学部附属小学校で、5年生を担当することになりました。インターンシップ先の先生や、木曜日のカンファレンスでは同じ大学院生の仲間や先生方と、何でも素直に言い合える環境をつくれるよう、よりよい人間関係を築いていきたいです。また、多くの仲間や先輩方の良いところをたくさん見つけて、自分の力を伸ばしていけたらと思います。明るく楽しく毎日を過ごせるよう、頑張っていきたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いたします。



加藤 儀直 かとう よしなお

本年度、教育学研究科教職開発専攻に入学した加藤儀直です。4月1日より、至民中学校にてインターンシップを行っています。

学部時代は、「学校文化」を一つの切り口にして卒業研究に取り組んできました。学校文化とは、学校の制度や校風、教師集団、生徒集団を指すことが多いのですが、研究を進めていくうちに「別のフレームがあるのではないか」と考えるようになりました。その契機となったのは、総合的な学習の時間（総合）に焦点を当てるようになってからです。

総合は、学校によって取り組みは様々であり、学校の特色が出る活動の一つであるといえます。しかし、

何年にもわたって活動を重層的に行うこと、そして、先輩と後輩の相互の関わりによって活動を展開していく例は私の知っている限りでは多くはありません。

『奇跡と呼ばれた学校』（朝日新書、2007年）で有名な京都市立堀川高等学校や、総合において特色ある実践を行っている長野県伊那市立伊那小学校の場合、個人単位での探究活動あるいは、学級単位での探究活動が活動の一つの軸となっていました。しかしながら、事例として取り上げた本学附属中学校の場合は、個人ではなく学年全体で、さらには、学校全体で探究活動を行なっていく点が特徴的でした。このような背景には、学校で行われている特色ある活動が一つの文化として根付いていると考えられますが、それを衰退させることなく持続的に発展させていくためには相当

の労力を必要とします。ただ活動をやるのではなく、常にやってきたことの意味を問いなおし続けること。これが一つ大事になってくると考えました。

4月1日よりインターンシップを行っている至民中の場合、Cタイムという名称で「総合」を行っています。そして、学校生活では異学年が日常的に関わり合う場面（クラスター）が多く設定されています。この点は、卒業研究で見てきた事例とは大きく異なるポイントです。今年度の至民中は、昨年度と比べるといくつ

か変わった所がありますが、新しいシステムの中で、新たな「真・至民中の学校文化」を創ろうと動き出しています。

最後になりましたが、これからの2年間は、私にとっていろんな意味で「激動」の2年間になると思います。子どもを見とることだけではなく、長いスパンでのカリキュラムの構想の仕方など、様々なことを学んでいきたいと思っています。2年間、よろしくお願い致します。



天谷 美怜 あまや みさと

はじめまして。教職専門性開発コースに入学しました天谷美怜です。出身は福井県ですが、大学は信州大学教育学部に在籍し、保健体育を専攻していました。

四月から中藤小学校でインターンシップをさせていただいております。今年度から新校舎に移転した新しい環境で、先生方と子どもたちがどのように生活していくのか、自分はどのように関わっていけるのか、不安も大きいですが楽しみながら貪欲に学んでいこうと思っています。

私は教職に対する強い思いも信念も無いまま、免許をとり教員採用試験を受験しました。そんな私が教師になりたいと心から思うようになったきっかけは、学部四年の八月から九月にかけてさせていただいた、特別支援学校での教育実習です。そこでは私にとって大きな二つの学びがありました。一つ目は子どもとの関わり方です。それまで中、小学校の実習では「教師対、児童・生徒」としてしか子どもと関わることができませんでした。特支実習では「子どもたち一人ひとりと自分」がどう関わるべきかを日々考えながら、信頼関係を築いていくことを学びました。二つ目は子どもとの向き合い方です。特支学校の先生方は、ただ楽しい授業をつくるのでは無く、「いずれ社会で生きていく力をつけること」を常に意識して指導していらっしゃいました。その姿から、「教師の支援が子ど

もたちの人生に大きく関わる」という当たり前のことを、初めて、強く、実感しました。この二つを学び感じると同時に、それらはどの学校のどの子どもと関わるときでも大切にしなければならないことであると気づき、それまで授業に追われた実習しかしてこなかった自分を恥ずかしく思いました。そして、言ってしまうと他人である子ども一人ひとりの人生を、自分のことのように日々真剣に考え続けることのできる、教師という仕事の責任とやりがいを強く感じたのです。

また大学では、運動学に基づき初心者指導に取り組む研究室に所属していました。そこで一貫して大切にしていた考えは、「生涯を通してスポーツを楽しむために、今この人にすべき指導は何か」というものでした。私はこのような、人生を見通した視点を大切にしたいと願うと同時に、自分にはそのように物事を見る力が乏しいと強く感じています。

これらのことから、学校生活を通して子どもと関わりながら、その子が「生きていく」ために今何が必要か、そのために自分はどんな言葉がけや関わりをすべきかを考え判断し、伝えることのできる教師になりたいと願うようになりました。長期インターンシップでは、一年を通して学校生活に関わっていくことができます。目の前の子どもがこれから「生きていく」ために、自分は教師として何を伝えたいのか、その視点を忘れずに子どもと関わっていこうと思います。この二年間で教師として、人として、子どもたちの人生に関わる者として成長していきたいです。どうぞよろしくお願い致します。



鈴木 馨 すずき かおる

こんにちは。今年4月から教職大学院教職専門性開発コースに入学した、鈴木馨です。これから1年間、附属中学校でインターンシップをさせて頂くことになりました。

私は学部3年生のとき、附属中学校で約3週間教育

実習を行いました。実習では、特に3つのことを学びました。

1つ目は、授業や学級活動で、私が適切な言葉を思いつけなくて言い迷ったりしていると、それが私のふとした仕草や声の表情などに表れ、生徒が素直に反応してくるということです。しかも、その反応の仕方は様々なもので、一度としてクラス全体が画一的な雰囲気になりませんでした。

2つ目は、先生方の指導力の原点に値する、「自分らしさ」です。附属中学校には様々なタイプの先生方がいらっしゃり、それぞれの先生方から学んだことは全て違いました。「自分らしい」先生ほど生徒との駆け引きなどで上手く関係を保つ事ができ、見ていて安心感がありました。

3つ目において、生徒と私の関係、先生方と私の関係、生徒と先生方の人間関係についてのコミュニケーションです。この力が必要だと思ったきっかけは、同じ教育実習生とお互い助け合ったり励まし合ったりしているときです。仲間（先生）同士良い人間関係を築けば築くほど、生徒もその心地良さを感じるのか、その教育実習生の周りに笑顔が集まってきて、積極的に関わり合いを持つようとしていました。素の自分を出すことが学校現場の人間関係において切磋琢磨する重要な部分だと思いました。



坂下 元 さかした はじめ

こんにちは。至民中学校に配属されました坂下元です。専門教科は英語です。今現在、インターンシップが始まって新しい環境に適應することで精いっぱい状態です。しかし実際に学校現場に入ってみないと分からないような会議の様子やクラス決めの様子などを間近で見ることでいかに教師という職業に専門性と柔軟性が求められるかを強く実感しています。また、至民中学校という先進的な取り組みをしている環境で、インターンシップをできることに喜びを感じています。至民中学校は現在変革の中にあるようです。まだ生徒と関わる機会は多くはありませんが、落ち着きがなく、机に座ってられない生徒も少なくないようです。このような状況のなかではたして授業を成立させることができるのだろうかという思いと、この子達が食いつくような授業ができればいいだろうなという思いが混ざりあっているような不思議な気持ちで新しい日々を過ごしています。

さて、次に僕が教職を志したきっかけについてお話したいと思います。僕は大学二年生から卒業までの二年

教職大学院では、2つのことを学んでいきたいです。

1つ目は、長期インターンシップです。教育実習では、単元に焦点を当てることができず単発の授業で、生徒とは表面的な付き合いであったような気がします。「生徒との関わり」においては、長い見通しのある授業を通して生徒と深く関わっていきたいです。また長期インターンシップでは、教育実習では学ぶことができなかった「学校経営」についても学んでいきたいです。

2つ目は、「仲間と共に学んでいく」ということです。これから長期インターンシップを経験していく上で、授業のこと、生徒のことなど様々な悩みが出てくると思います。その悩みを、違う校種・教科の仲間打ち明け、お互いに情報交換することで悩みを共有して分かち合えると思っています。また、大学の先生方、配属先の先生方には積極的に自分から質問し、見習うべきところをどんどん吸収して貪欲に学んでいきたいです。

間、外部指導員として中学生にバスケットボールを指導していました。指導を始めたころ僕は子供たちに技術やメンタル面での強さが足りないと感じ、すべての練習内容を僕が決め、その通りに子供がメニューをこなすことを求めています。しかし、僕の意図とは反し、子供の意欲はなく、競技の力も伸びていきませんでした。そして最終的にはキャプテンが部活を辞めてしまうという結果になってしまいました。そのことをきっかけに僕は自分の指導を見直し、生徒自身が練習内容を決めたり、話し合いの機会を増やすなど、生徒の自主性を重んじた指導を心がけました。そうすることで、最初は生徒は戸惑っていたものも、徐々に自分に必要な課題を自ら考え練習を組み立てたり、上級生がすすんで下級生に教えたりと生徒同士が成長し合う環境が出来上がり、競技の力も飛躍的に伸びました。

このような経験から私は「教育は矯正ではなく、自主性を育むこと」という今後の教員人生での自分の原点になるであろう考えを持つことができました。僕は、子供が僕の与えたきっかけで想像以上に成長する姿を見ると強烈な生きがいを感じます。これからの二年間少しでも子供が自主的に成長することを支援できるような教員に近づければと考えています。



角谷 健大朗 かどや けんたろう

奈良県天理大学から福井大学教職大学院に入学することになりました。角谷健大朗です。教科は保健体育です。特技はサッカーで、小学2年生の時からサッカー

を続けており、今は社会人の坂井フェニックスというチームでプレーしています。丸岡南中学校に、火曜・水曜・金曜の週3日インターンさせていただくことになりました。主に、3年生を担当し、サッカー部を担当することになりました。

私の大学時代は、天理大学体育学部体育学科という

ことで、毎日スポーツの授業があり、一通りすべてのスポーツを体験することができました。周りは体育学部ということもあり、すごい身体能力の持ち主ばかりで、同期では、ラグビー日本代表に選出された人や柔道の世界大会で金メダルを獲得した人がおり、トレーニングルームには、いつも柔道日本代表の穴井隆将さん、柔道元日本代表メダリストの野村忠宏さんがトレーニングを行っていて、近づけないオーラがすごく漂っていて、この人たちは普通の人ではないと感じました。また、柔道日本代表監督の篠原信一さんに授業を教わることもあって、すごく良い経験になりましたが、正直聞きづらくて何を言っていたかよくわかりませんでした。

私は、丸岡南中学校のサッカー部を担当していますが、自分も生徒たちにまざって練習をしています。社会人チームでサッカーを続けているので、中学校での部活動参加は、自分の運動のためでもありますが、何

より生徒たちに良い刺激を与えることができればいいなと考えています。どうしても言葉では伝えにくいし、伝わりにくいので、実際に行動で伝えることがすごく重要なことだと思っています。すべてを教えるのではなく、1を教えて生徒に考えさせ、生徒が2、3と、より多くの答えを出してくれることが理想です。やはり、生徒に考えさせ、試行錯誤させることは、すべてにおいて大切なことだと私は思っています。

私は、2年間のインターンシップで、生徒とのコミュニケーションを一番大事にしていきたいと思っています。いろいろな生徒がいるということは、いろいろなコミュニケーションのとりかたがあるということなので、生徒一人一人と関わっていきながら、自分も成長していきたいです。これからのインターンシップを、将来生かしていけるように、積極的な姿勢で取り組み、有意義な時間にしていきたいと思っています。

◆福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻/スタッフ一覧

松木 健一	まつき けんいち	専攻長/教授	教育臨床心理学
寺岡 英男	てらおか ひでお	副学長/教授	教育方法学
森 透	もり とおる	教授	教育実践史
柳澤 昌一	やなぎさわ しょういち	教授	社会教育学
松田 通彦	まつだ みちひこ	教授	教育行政マネジメント
二宮 秀夫	にのみや ひでお	教授	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
小林 真由美	こばやし まゆみ	教授	カリキュラム・授業改革
濱垣 良介	いながき りょうすけ	准教授	カリキュラム・授業改革(保健体育科教育)
濱口 由美	はまぐち ゆみ	准教授	カリキュラム・授業改革(美術科教育)
岸野 麻衣	きのの まい	准教授	幼児教育
木村 優	きむら ゆう	准教授	教育学
笹原 未来	ささはら みく	講師	特別支援教育
山野下 とよ子	やまのした とよこ	特命准教授	算数・数学教育
前園 泰徳	まえぞの やすのり	特命准教授	環境教育・ESD(持続可能な発展のための教育)
杉山 晋平	すぎやま しんぺい	特命助教	社会教育学
山口 真希	やまぐち まき	特命助教	発達心理学
藤井 佑介	ふじい ゆうすけ	特命助教	教育方法学
巨田 尚彦	おおた たかひこ	客員教授	カリキュラム・授業改革
玉木 洋	たまき よう	客員教授	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
松井 富美恵	まつい ふみえ	客員教授	障害児教育・教師教育
山下 忠五郎	やました ちゅうごろう	客員教授	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
富永 良史	とみなが よしふみ	非常勤講師	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
松田 泰俊	まつだ やすとし	非常勤講師	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
渡辺 本爾	わたなべ もとじ	非常勤講師	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
中川 美津恵	なかがわ みづえ	非常勤講師	コミュニティとしての学校と教師の力量形成

Schedule

4/20 sat - 4/21 sun 合同カンファレンス 4/27 sat - 4/28sun 合同カンファレンス(予備日)
 5/18 sat 合同カンファレンス 5/25 sat 合同カンファレンス(予備日)
 6/29sat - 6/30 sun 実践研究福井ラウンドテーブル2013

[編集後記]

いよいよ平成25年度が始まりました。教職大学院6年目の出発です。今年度は新1年生のスクールリーダーと教職専門性開発の院生が33名入学され、2年生の29名、それに研究生1名の合計63名の人数となりました。先日の開講式は緊張と感動の日だったと思います。この1年間、フレッシュな1年生のエネルギーとベテランの2年生の豊かな経験をバネに、お互いに学び合い協働しながら実践研究を進めていけたらと期待しています。(M)

教職大学院Newsletter No.52
 2013.04.20発行
 2013.04.20印刷

編集・発行・印刷
 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
 教職大学院Newsletter 編集委員会
 〒910-8507 福井市文京3-9-1
 dpdtfukui@yahoo.co.jp

